

<書 評>

「現代教科教育学大系・2

言語と人間 倉沢栄吉 編著
野地潤家

塚 田 泰 彦

本書の目的は、言語と人間との実存的関連を視座として、言語教育を言語生活の中から多層的に摘出することによって、それぞれの内実近代科学的志向性を打ち出しつつ、再度、新しい視点から言語教育の総合的プロジェクトについての広汎・多岐に渡る諸視点を掌握しようとしたところにある。編者が「まず言語教育論関係の講座や単行本をなるべく広くあさり、それらの目次を一覧し比較し検討して、何が一般内容であり、どういうところへ新風を送るべきかを考え合った。(略)次に本書はなるべく巨視的に、グローバルな視点から最近の動向や研究成果を採り入れたものにしようと努めた」(“まえがき”より)と述べている点からも、このような目的を持ったものとして本書を規定してよいであろう。

各章は、「言語教育の哲学と思想」・「言語教育への学際的視点」・「教科教育としての言語教育」・「言語教育の未来像」・「言語教育の実践と探究」から成り、30名を越える各専門家が、それぞれの専門分野を一通り独自の整理を行なうことによって、再考の視座・視点を、全体の理念・目的の許に探究している。さらに各章末には編者によって、それぞれの収録論文にも言及しつつ、その章における新しい視点と留意点を、再度全体的意図の許に位置付けることによって、400頁に及ぶ、構成面での本書の目的への寄与を計っている。

ところで概ね、言語生活における言語と人間の複雑にして多層的・根源的・有為的な関連の深層において、言語との独自の対話を試みる著者達は、その一般概念を生活から切り離して科学的に処理することの不毛さに心して、この世界の諸内実とともに再度言葉の深淵に入り込む。そして個人としての視座から言葉の世界に生きることによって、著者自らのイメージを消し去らない半ば生の言葉で、専門の概念を綴って来る。しかも、そこに近代科学的意志を反映することによって供される新しい領野の内容は、一般概念が生きた状態に放置されることによって、生産的・創造的というニュアンスを獲得して来ることになる。本書が単に教科教育学としての科学性を強調するばかりでなく、生産性・創造性という主旨を随所で表明するのも、こうした各執筆者の思考が引きつれて来た一つの真実の言葉との対話そのものの姿であろう。ここに言語という対象に投げかけられた千本の清冽な槍先を見る思いがする。

我々は一人の著者の手になる書物では、この種の企画本の醍醐味を味わうことは不可能である。また、さらに一人の手になった一本の槍先が幾分か抽んでその本質に迫ったとしても、我々は時としてそのような書物においては、槍先の特質の方に目を奪われがちである。即ち、対象と槍先との空隙に繰り広げられる知的操作の実態を一つの方法的なるものとして著者の才覚に帰せてみようとすることで、読みの視線を対象から剝奪されがちなのである。このことは決して一人の読者の読

みとしては否定すべきではない。むしろ、この読みが読解力の習得に大いに関連しているからである。何故なら、我々は人の言葉を聞いて、その人の生活を問うのであり、その人の言葉を聞いて、その人の生きている時間を知るのだから。しかしながら、対象物が科学的処理に供さるべき状態で、これを読みとらねばならない読者が、遂一著者の槍先の特質に目を向けてばかりはいられないものである。ここに本書のような書物の個人的な扱い方の本来性が考慮されねばならないだろう。（好きをよみ個人が読むことの二面性に対する認識が必要である）

ここで、本書の目的と特徴を考慮しつつ、読者として我々ほどのような状態に置かれ、亦、何を本書は我々に求めているかに関する私見を述べることは無意味ではなからう。

書物は目的と出来映えによって、二種に大別される。一方は或る事柄の証明（検証）であり、他はヒント（資料）集である。無論、両方の特質を含みつつも、どちらかに傾いているものである。（前者に比べれば、後者の書物の扱いに我々には不慣れであるようだ）恐らく、一冊の書物を手にしたとき、それが前者であるのか、後者であるのかの区別が出来ることが読み取りの基本事項に相等する。仮え、証明・検証に向けて書かれた書物でも証明し切れていないものは、ヒント集に過ぎず、丸で資料集のように見えていながらも、立派に何らかの証明のために資料・ヒントが整然と構築されているものもある。この区別に際して、我々が一番拘泥するものが書物自体が持っているところの意志（平たく言えば著者の志向性と文体）である。この意志は純科学的著作においても存在するようだ。しかも殊に理論の先端における書物においてそうである。即ち、読書に当って、何かを知るという過程で、先述した生産性・創造性を言葉の特質の変貌として感じるときに、我々には不明確な対象と著者の槍先との空隙における自らの拘泥を意識するのである。しかし、この種の書物は、生産性・創造性を読者に予感させつつも、自己の証明を遂行するものなので読了において読者を書物から投企する。このことは、その書物が読者なしに自足し完成しているということであり、先述したような読者の拘泥は、その書物の何ものをも変貌せしめない。むしろ、もし我々がこうした書物について何かを読解し得たら、しかもそこから何かを独自に組み立て得たら、それは好きをよみ個人が読むことの二面性の良い方のもの、即ち、書物による投企を良く生きることになるのである。名著は常にこの投企を既に保障するものである。しかし逆に我々が後者のヒント集についての扱いに不慣れなのは、こうした独自の読みをその書物が保障してくれない点に起因している。この種のもは読者の介入を待って始めて書物として完成されるものであり、一方の極に文学作品を置くことが出来る。何故なら文学作品は証明しようとしないのであって、むしろ或る選ばれたものを提示するからである。また他の極には純然たる資料集を置くことができる。ただこの両極のものを読み方にも最良のものエッセンスを見出すことは可能だが全く自由に伏しても当面その書物自体の広汎な読みに支障を来さないだろう。

しかし、以上のような典型の中間に位置する書物の扱いについては、まず著者の意向を大切にしてみることは必要なことであろう。この書評の対象となっている書物もこうした点に充分注意を払って読まないと、編者の意を解さない何とも下らない読者に我々をしてしまうだけの構築度を持っている。この書物は、（一つ一つの論文を個別に扱えば、それは一つのみまとまりを持ったものとし

ての価値を持っているが、)言語教育の総合的プロジェクトのためのヒント集として受け取るべきであり、しかもそうした特徴が、あらかじめ自覚的に採択されているという点が重要である。我々はこの点に注意しつつ、一つ一つの新しい視点からの論文に、ヒント集の例に洩れず、まず考えることから始めねばならない。しかもヒントの提示方法が様々であるとは言え、ヒントの指向性は、常に言語生活における言語との実存的対話による生産性・創造性を科学的に取り出そうとする点にある。ここでは、著者一人一人が全体的志向性に向けたのと同じ思考の目を持って、言語教育の各面各層に対峙することが肝要である。その意味でこの書物は読者各自の専門や興味のある論文だけを拾い読みして、その論文の独自の取り扱いを個人に委ねるようなヒント(資料)集ではない。まず全体を貫く意志を充分確認した上で、言語教育の哲学と思想を反復し、真に近代科学的であり得るために学際的視点の要点を認識することによって、教科教育としての言語教育の位階を再考し、以上3章で提示された幾多のヒントをもとに読者独自の未来像を第4章の“言語教育の未来像”に照らしつつ、新たなプロジェクトに向けて全ての思考を集中することになる。

言語の広汎且つ絶大なる存在に対して、我々はその幾何を知り得るかすら予測することができない。しかし、この書物は、一人一人の著者の言葉についての問答が我々を言葉の深淵に引きずり込み、そこで立ち現われる闇の中に茫然として言霊を見るとき、我々は深い眠りの中ですら明朝の“おはよう”を再認することが可能となるということを保障してくれる。

最後に20以上の論文の一つ一つを検討することによって、新しい成果の一端なりにも言及すべきであったが出来なかつた点や、第5章に設けられた多くの実践的探究についても触れられなかつた点は、偏に私の力量のためである。後者の点については、「終末のかなりのページを実践編として、各地の著名実践人およびサークルにそれぞれの領域での計画と展開のモデルを提示してもらった。この部分だけでもかなりの重量感があるとほそかに自負している」(“まへがき”より)という編者のことばを付すことで書評の任を免れたい。

(A5判・384頁・1600円 第一法規刊)